初牲之犊不怕

北 基行 訳

北京　東城区国士監街　孔廟

生まれたての子牛は虎をおそれない

今回の世界卓球選手権や、その他の試合成果が話題にあがると、中国青年チームに入れ替わり立ち代わり現れる新戦力を称賛して、決より父句、“生まれたての子牛は虎を恐れない”、が使われる。通り一遍のことなら、この表現でもよかろう。落ち着いて考えるとこの諺はピント外れだ。生まれたての子牛が、虎に面向かえるはずがない、ただ恐さを知らないだけだ。我国の青年は実戦を学び、実戦から学ぶ。生まれたての子牛と比較するわけにはいかない。彼らの実力は虎ゃんてものではない。

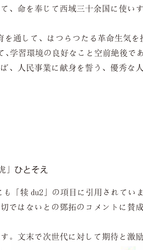
青年が つぎつぎに打ち立てる大成果の底流には勝利の法則－新生力の不断の成長－が作用しているのだ。ゆえに断して打ち負かされない。過去もこうであったし、現代もこうであり、将来もこうなのだ。“長江の後浪　前浪を推し、一蕚の新人　旧人に替わる”という言葉通りを実行しているのだ。誰であろうがひとだび気を抜けば、直ちにはじき出され、追い越される。これが現実であって、いまではなんら珍しいことではない。

いままで思想家、政治家、科学者、文学者など多くの偉人を論じてきた。それぞれが皆弱冠にして頭角を現している。その中に、二十代で名を成した者が十人ほど含まれ、みな早熟であるが、二十歳以下はさすがに少ない。二十歳以下で名を残した人物を、古代史から洗い出せば、ひょっとしたら何か共通点が見つかるかもしれない。

北京　孔廟　清代進士題名碑　科挙時に進士合格者の氏名と出身地を刻む

『宋史』『寇準傳』によると、“準少（わか）くして英邁、春秋三傳に通じ、年十九にて進士に挙せらる。”『宋史』『張耒傳』によると、“耒（らい）少（わか）くして穎（えい）英（えい）にして、十三歳にてよく文を為し、十七の時 函関賦を作り、己に人口に傳ず。”『宋史』列伝を無作為に繰くと、十七、十八、十九歳で名をなした例があり、もっと若い者も出てくる。例えば孔子の孫にあたる子思は、年十六歳で、宋国の大夫 樂朋と議論を交わして、樂朋を言い負かしている。樂朋は老醜をさらされ、怒りを抑えきれず派氏し子思を囲んだ。宋君が動いてやっと子思を助けだした。このような人物は史上に少なからず残っている。もう一例、唐代の大詩人王維を紹介しよう。“獨り異郷に在って異客と為る、佳節に逢（あ）う毎（ごと）に倍（ます）ます親（しん）を思う、遙かに知る兄弟高き處に登る、遍（あま）ねく茱萸（しゅゆ）を挿して一人を少（か）くを”。この一首は誰でも一度は読んだことがあるだろう。でも、十六歳でこの詩を作ったことを知るひとは少ないのではないか。

古人の子供に、大人顔負けの大事が為せたのはなぜか？　そのキーポイントは、早くから子供に教え込むことにある。『礼記』『内則』に次のような一条がある。“子生まれ六年にして、之に数と方名を教う。”　それ故に古人には知識豊富な子供が多い。漢代の伏波将軍馬援は、“六歳にしてよく諸侯を接応し、導ら賓客に対して　たのである。宋代の大詩人黄山谷は、“七歳にして牧童の詩を作り云わく；牛に鞭し途遠と前村を過ぎ、吹笛風斜にして隴（あぜ）を隔てて聞く、多少 長安名利の客、機關用い盡せども君に知かず”。知何ですか、この詩の素晴らしいこと。後漢の馮（ひょう）勤は、“八歳にして詩賦を著くす”。唐代の詩人白居易は、“九歳にして声律を暗ず”。これらの例を挙げはじめるときりがない。



小さい頃から学習を始めると、早死短命を恐れる人もあるが、そんなことはあり得ない。上に挙げた人は早死短命ではなかった。脳と身体の各部分の均斉がとれ、官能的な負担に堪え得れば、即ち無理を強いなければ、少年の育成訓練は正常な生理発展の規律に合致するものである。従って、青少年の養育と訓練には、欲張らない、負担過多にならない注意が必要である。同時に、甘やかさない、過保護はいけないが、自分で選択する責任が未だ生じた時期である。『後漢書』『張霸傳』の記載によると、“霸七歳にして春秋に通じ、余経に進まんと欲す。父母曰く、汝小なり、未だよくそぜざるなり。霸曰く、我之を為すに鹸（あまり）あり。”彼自身がやりうると述べているので、彼にやらしても、問題はない。

現役世代に、次世代を指導支援する責任があることは言をまたない。元の太宗は青年を啓発起用することに長けていた。『元史』『楊忠傳』によると、“惟忠書を読む知り、胆略有り、太宗之を器とす。年二十にして、命を奉じて西域三十余国に使いす。”

歴史上に同例は多い。

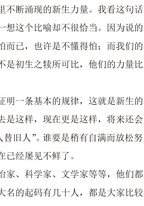
現代の青年は、“五四”以来の伝統的革命教育を通じて、はっきりつける革命生気を授かり、時あたかも社会主義革命建設時期に際して、学習環境の良好なことと空前絶後である。今、正確な指導と支援の手を差し伸べてやれば、人民事業に献身を誓う、優秀な人材がその後に陸続と続くのである。

【 掲載当時の時代背景と秘められたメッセージ 】

「初生之犊不怕虎」ひとそえ

標題の成語は、新華字典にも、中日大辞典にも「犊 du2」の項目に引用されています。卓球で世界制覇した選手たちを称えるには適切ではないとの郭拓のコメントに賛成です。

科挙を基準にした歴代の神童天才が並びます。文末で次世代に対して期待と激励をしていますが、ご存知の通り、文革で教育機会を減らし、一人っ子政策では小皇帝を生みました。現在、衣食足りた高学歴の若者に対して、上の世代からは辛口の批判を聞きます。曰く、頭でっかち、「草食系」が多い、面白みに欠ける、ガッツが不足・・・



ところで、「虎」と言えば、毛沢東が 1946 年に米国記者に語り、1958 年の党の会議で念押しをした「一切反動派都是紙老虎」という言葉を想起します。「あらゆる反動派は張り子の虎である」という有名な文言は、レーニンの反動派攻撃の二番煎じとは思わせない比喩の巧みさがあり、米国帝国主義は怖れるに足らずと中国人民に信じ込ませました。ところが、昨今では「紙老虎」は中国の二艘の空母に対して日米から使われるようになりました。

紙老虎は道教町の少彦名神社（神農さん）に飾られるのが一番です。　　井上邦久

初牲之犊不怕　原文

最近在人们谈论世界乒乓球锦标赛和其他成就的时候，常常引用“初生之犊不怕虎”这句成语，来形容中国青少年队伍里不断涌现的新生力量。我看这句话，作为一般的比喻来说未尝不可，但是仔细一想这个比喻却不很恰当。因为说的是初生的牛犊，实际上比不得老虎，只是不怕而已，也许是不懂得怕；而我们的年轻一代经过实际较量完全证明，他们根本不是初生之犊所可比，他们的力量比虎还要强。

许多年轻的人所创造的巨大成绩，只能证明一条基本的规律，这就是新生的力量总是不断在生长，总是不可战胜的。过去是这样，现在更是这样，将来还会是这样。这真好似“长江后浪推前浪，一蕚新人替旧人”。谁要是稍有自满而放松努力，马上就会被别人赶上和超过。这类事实现在已经屡见不鲜了。

我们曾经谈论过许多伟大的思想家、政治家、科学家、文学家等等，他们都是很年轻就已经成名了。其中二十多岁而成大名的起码有几十人，都是大家比较熟识的；但是二十岁以下的毕竟还很少。现在我例要谈谈中国古代二十岁以下的著名人物，看看从中还能找到一些什么有用的经验。

《宋史》《寇准传》载：“准少英迈，通春秋三传，年十九举进士。”《宋史》《王岩叟传》载：“岩叟十八，乡举、省试、廷对皆第一。”《宋史》《张耒传》载：“耒少颖异，十三岁能为文，十七时作函关赋，己传人口。”随便从《宋史》列传中查一下，十七、十八、十九岁成名的例子就都有了。还有年龄更小的。比如孔子的孙子子思，年十六，就与宋国的大夫乐朋辩论，把乐朋驳倒了，乐朋老羞成怒，派兵围攻子思，后来宋君终于救出了子思。历史上象这样的人物相当不少。再举唐代著名的大诗人王维为例，大家都读过他的一首诗：“独在异乡为异客，每逢佳节倍思亲，遥知兄弟登高处，遍插茱萸少一人。”然而大家未必都记得，王维写这首诗的时候实际上也不过十六岁啊！”

为什么古人年纪很小就有很大成就呢？关键之一是他们往往很早就开始学习。《礼记》《内则》有一条：“子生六年，教之数与方名。”所以有许多古人，幼年就很有知识。汉代的伏波将军马援，“六岁能接应诸公，专对宾客。”宋代大诗人黄山谷，“七岁作牧童诗云：骑牛远远过前村，吹笛风斜隔陇闻，多少长安名利客，机关用尽不知君”。唐代的大诗人白居易，“九岁诗于声律”。这类例子是举不完的。

有人担心年纪很小就开始学习会短命早死，其实不然。以上所举的古人就没有短命早死的。只要脑子和身体各部分相应的官能担负得了，并不勉强，就可以进行一定的学习和锻炼，这完全符合于生理发展的正常规律。因此，对于青少年的培养和训练，要注意既不要贪多图快，用力过火；也不要骄养溺爱，过于保守。还应该让年轻的人自己做某些挑择。《后汉书》《张霸传》载：“霸七岁通春秋，复欲进余经。父母曰：汝小，未能也。霸曰：我饶为之。”他自己认为做得到的，却也无妨让他做去，不至于有什么害处。

年长的一辈当然有责任对年轻的一代加以指导和扶掖。比如元太宗就懂得使用青年。据《元史》《杨惟忠传》载：“惟忠知读书，有胆略，太宗器之。年二十，奉命使西域三十余国。”同样的例子在历史上也还有许多。

现在我国年轻的一代，受到了“五四”以来的革命传统教育，具有蓬蓬勃勃的革命朝气，在社会主义革命和建设的时期，又有了空前良好的学习条件，只要能够得到正确的指导和扶掖，今后在他们当中将会出现更多的优秀人物，为人民事业做出更多更大的贡献，这是决无疑问的。

【語句解釈】

・多少长安名利客，机关用尽不知君－－名とお金のある人は長安に多い、それらが楽器という楽器を揃えて演奏しても君の笛には敵わない。

机关：機器を指すが、ここでは楽器を総称している。